



ムカシの競馬を読む



すだ たかお 須田 鷹雄

1970年東京生まれ。競馬ライター。サラブレッド、大阪日刊スポーツなど各種媒体に寄稿中。

最終回 10年・20年・30年前の12月

早いもので、この連載も開始から約12年、最初は月ごとにテーマ制でまとめたが、10年・20年・30年前を振り返るようになってから10年が経った。つまり、来月以降同じ形で続けてしまうと3ブロックのうち2ブロックがかつての原稿と重複する時期ということになってしまふ。そこで、現在の形式での連載は今回が最終回ということになった。

それでは今から10年前、平成19年の12月を振り返ってみよう。マツリダゴッホが9番人気で有馬記念を制し、3連単が80万円台の大穴となったのがこの年の有馬記念だった。

後から振り返れば中山巧者のイメージが強いマツリダゴッホだが、このときどれほど意外な勝利だったかは、翌日のデイリースポーツを引用すれば分かる。

「なんと馬主、生産者ともに不在のまままで今年の有馬記念は表彰式

が行われた。オーナーの高橋文枝さんは当初来場予定だったが、体調が思わしくなく出席できなかった(中略)生産者の岡田牧雄さんは『オーナーにすべてを任せていたからね。テレビを見ていて絶叫したよ』と興奮ぎみに語った」

記事によると幸い、国枝師は中山にいたとのことであった。この12月は1日に、ある大都市にやっとJRAの馬券売り場ができた月でもあった。オープン前の記事しか見つからなかったので、平成19年11月30日の日刊スポーツ福岡版から引用しよう。

「JRAの37個目の場外発売所・エクスセル博多(福岡市博多区中洲3丁目)が、いよいよ明日オープンする。当日先着順の有料定員制で568席を用意。くつろぎと非日常感が楽しめる空間だ(以下略)」

5000席規模のエクスセルとはいえ、あれだけの大都市にJRAの場

外が無かったわけだから、オープンしただけでもめでたいことである。ちなみにエクスセルという業態で西日本に設置されたのはこれがはじめてだった。翌年6月にはウインズ新横浜がオープン。ここから平成23年のエクスセル浜松あたりまではJRAによる現金投票の拡大期で、平成25年になるとJPLACEの展開と入れ替わりに銀座通り、室蘭、静内といったウインズが廃止された。

続いて20年前、平成9年の12月。シルクジャスティスが有馬記念を制した月だが、この平成9年はJRAの売り上げピークであった。4兆とんで6億強と史上はじめて4兆円超えを果たしたが、入場人員は対前年で92.1%だった。電話投票の存在感が大きくなっていった時期であった。

この12月には不祥事といえば不祥事なのだが、後から振り返ってみれば笑えるというか、この連載向き

なはずだが、6番人気5着という微妙な結果。1着は同着で1番人気エフワンナカヤマと3番人気マチカネシルヤキミ。3着に2番人気のマンダリンスターだった。この時代らしく上位人気の外国産馬が上位を独占し、結果的に馬券の中となった人が多かったせいも、特に騒ぎなどにはならなかった。

記事中にある「疲労が激しいことで発走除外」となった2頭はベリールウエル号とシルキーピンク号。前者はその次のレース以降も結果が出ずに佐賀へ転出。後者は地方交流で好走するなどタフな走りを見せ続けたが、2勝目をあげることができなかった。全体的に見て、ミスの大きさにわりにレース結果はいわゆる結果オーライ的な感じだったのではないかと思う。これが仮に人気馬大敗とか、人気馬が除外といったことになったら騒ぎも拡大していただろう。

20年前からはもうひとつ。正確には11月30日の出来事なのだが、12月1日の紙面から拾うということでご容赦いただきたい。12月1日付の日刊スポーツから。「こちらも地方が圧勝! 第14回東海ウインターSは30日、中京競馬場で16頭によって争われ、南関東・船橋から参戦の地方馬で1番人気アブクマポーロが2分24秒8

で中央重賞初勝利を果たした。石崎騎手、出川克己調教師はこのレース初勝利」

この勝利、実はいまだに「JRAの古馬重賞を地方馬が1番人気で制した」という、唯一の事例である。カク地馬によるJRA重賞の1番人気1着は他にラジノテンビー、ヤマノブリザード、コスモバルクが達成しているが、いずれも2、3歳重賞。フェブラリースを勝ったときのメイセイオペラは2番人気。ジュサブローやジョージモナークによるオーロカマー制覇はそれぞれ5、6番人気であった。

そもそも2000年代になると地方馬によるJRA古馬重賞制覇はゴールドブルーフの東海S(2位入線繰り上がり)とネイティヴハートのオーシャンSしかない。後者ですらもう11年前。2歳重賞ならまだしも、古馬で中央重賞を勝てる馬は中央に転入してしまっている可能性が高く、アブクマポーロのような馬はもう出てこないかもしれない。

最後にいまだ30年前、昭和62年の12月。この月はメジロデュレン・ユーワジェームスのいわゆる「ユヌ馬券」で有馬記念が決着した月である。しかしレースではサクラスターオーの故障やメリーナイスの落馬もあり、あまり夢に満ちた内容では

の事件が起きている。平成9年12月21日付の日刊スポーツから引用しよう。

「20日の中山競馬7R(サラ3歳500万円下、ダート1200メートル)で1番枠のタヤスユキヒメ(牝・高木)がゲート入りする前にゲートが開き、発走がやり直しになるという日本の競馬史上初めての不祥事があった。最初のスタートで2頭が直線まで走ってしまい、疲労が激しいことで発走除外となった」

紙面では、誰もいなくなったゲートの後ろでただ1頭常歩のタヤスユキヒメというシニールな写真も掲載されていた。このときのスターターはダービーの旗を振ったこともあるベテランの方だったのだが、おそらく「1番が最後入れ」というイレギュラーなケースだったので勘違いしたのだろう。

積み残されたタヤスユキヒメは走っていないので再発走時は有利なかつた。その数週間前、いまでも続いているイベントの第1回が行われた。その前編り記事を昭和62年12月2日付の日刊スポーツから引用しよう。

「世界のトップジョッキーが覇を競う国際騎手招待が5、6日の阪神競馬場で行われる。今季限りで引退表明した仏のイブ・サンマルタン、初来日を実現した米国のラフィット・ピンカイ・ジュニア、JCにも参加した英国のステイブ・コーセン、パット・エドリーら、5カ国から7人の外国人騎手と、東西を代表する日本の3騎手が参加する」

騎手は他にキャッシュ・アスムッセン(愛)、パット・デイ(米)、ランス・オサリバン(新)で、日本代表は岡部、河内、南井だった。シリーズではキャッシュ・アスムッセンが優勝。引退を控えたイブ・サンマルタンはシリーズ外のエクストラ騎乗で1勝をあげ、これが生涯最後の勝利となった。この国際騎手招待が、現在のワールドオールスタージョッキーズに繋がるわけである。

以上、長年お付き合いいただいた本連載は、これにて一区切りとなる。次号からは全く趣向の違う連載を始めさせていただきますので、お付き合いいただければ幸いです。

ムカシの競馬を読む



平成19年・中山競馬場
有馬記念
優勝馬:マツリダゴッホ

© JRA